第６編　山根Ｖ遺跡

第１章　既往の調査

これまで山根Ｖ遺跡では、今回の土地改良事業に伴う発掘調査を行うに当たり、周辺において発掘調査範囲を確定するための試掘調査が実施されている。本遺跡は湧水による軟弱地盤であったため試掘調査も行われておらず、今回が最初の発掘調査事例である。

平成 30 年９月初頭に土地改良事業の暗渠工事中に大量の縄文土器片が発見されたことが、工事業者より長野原町教育委員会に連絡があり、同月６日に長野原町教育委員会と調査担当者が現地を踏査し、さらに大量の遺物を採集した。この際出土した遺物は、表土一括として採り上げた。また、湧水に伴い、大型の礫が集中して認められたことから、縄文の水場遺構と推定されたため、翌週の 10 日より調査を開始することとなった。

第２章　調査の経過

発掘調査は、平成 30 年９月 10 日から開始し、同年９月 27 日に終了した。

９月 10 日、遺構掘削を開始する。９月 13 日、石組遺構の掘削、砂利層の検出を行う。９月 19 日、１Ａ～６号トレンチを掘削する。９月 20 日、導水路、５号トレンチ拡張、７～９号トレンチを掘削する。９月 21 日、降雨のため調査を中止し、出土遺物の洗浄を行う。９月 26 日、空中写真撮影を実施する。長野原町教育委員会が完了確認を行う。９月 27 日、撤収作業を行い、調査を終了した。

第３章　基本層序

今回の発掘調査では、工事により調査区内の土層のほとんどが除去されていたため、表土層から基盤層まで基本層序を確認できるような土層は残されていなかった。遺構外は工事による影響が少ない、２号トレンチの西壁面の土層（B3B3'）と、遺構内の基本的な層序は SU06 と SU09 の境界付近（AA'）で確認できた。この２か所の土層を中心に、各トレンチで観察された土層を対比して基本層序を復元した。

第Ⅰ層　黒 褐 色 土 ：表土である。粘性はあり、しまりは弱い。礫（φ 7.5 ～ 17.0cm）を含み、根や葉を多量に含む。未腐食の葉を多量に含むことから比較的最近に堆積した土層である。

第Ⅱ層　黒 褐 色 土 ：粘性はあり、しまりはやや弱い。礫などがほとんど含まれない。Ⅰ層が堆積する前の表土層か。

第Ⅲ層　黒 褐 色 土 ：石組遺構の埋没土である。粘性はあり、しまりは弱いが、流水にさらされるⅤ層との層理面付近ではしまりはない。礫（φ 0.5 ～ 15.0cm）を含む。遺物の大半はこの土層から出土している。Ⅳ層に酷似する。AA' の３層に相当する。

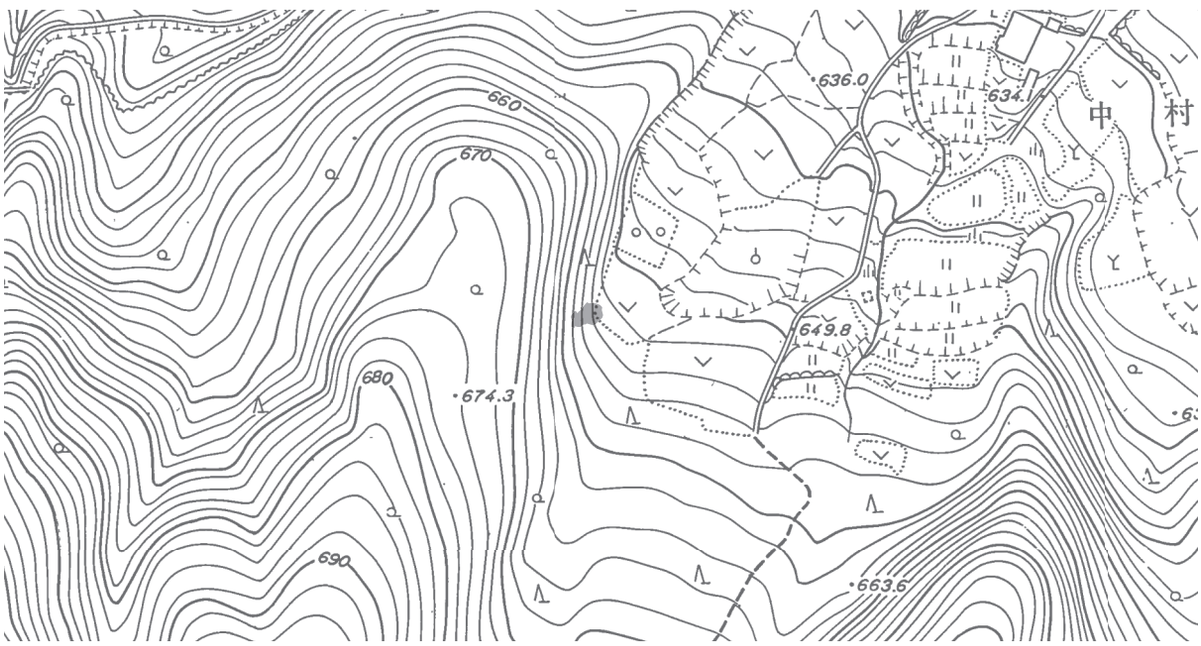
第Ⅳ層　黒 褐 色 土 ：粘性はあり、しまりは弱い。YPk（φ 0.1 ～ 1.0cm）と礫（φ 0.5 ～ 15.0cm）を少量含む。Ⅲ層に酷似する。石組遺構の外側にあることから、当時の地山層か。

第Ⅴ層　褐 灰 色 砂 ：石組遺構の底面の砂礫層である。砂を主体とし、土をほとんど含まないため、粘性・しまりともにない。礫（φ 0.3 ～ 19.0cm）を多量に含む。石組遺構の導水路や貯水槽の上段など、主に水が流れる箇所の底面に堆積する。一種の川砂とも考えられるが、水が流れていても堆積していない箇所もあるため、人為的に敷き詰められた可能性がある。遺物はこの層からも出土している。AA'、B1B3' の５層に相当する。

第Ⅵ層　淡 黄 色 砂 ：間隙を視認できない砂のブロックであるため、粘性はなく、しまりはある。

第Ⅶ層　明黄褐色粘土　：　粘性があり、しまりはやや弱い。YPk（φ 0.1 ～ 0.5cm）を少量含む。層序的にはⅥ層と同じである。

第Ⅷ層　黒　　色　　土　：　粘性があり、しまりはやや弱い。礫（φ 0.5 ～ 35.0cm）を含み、YPk（φ 0.1 ～ 2.0cm）を少量含む。下位にローム斬移層やローム層（礫混じり）がみられるため、いわゆる黒ボク層に該当する層か。



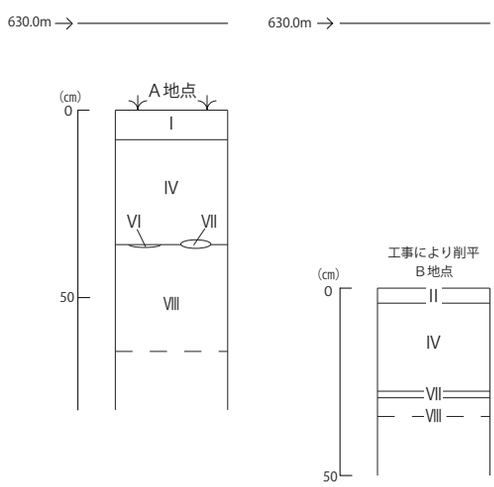
第263図　調査区位置図（1/2,500）

第４章　検出された遺構と遺物

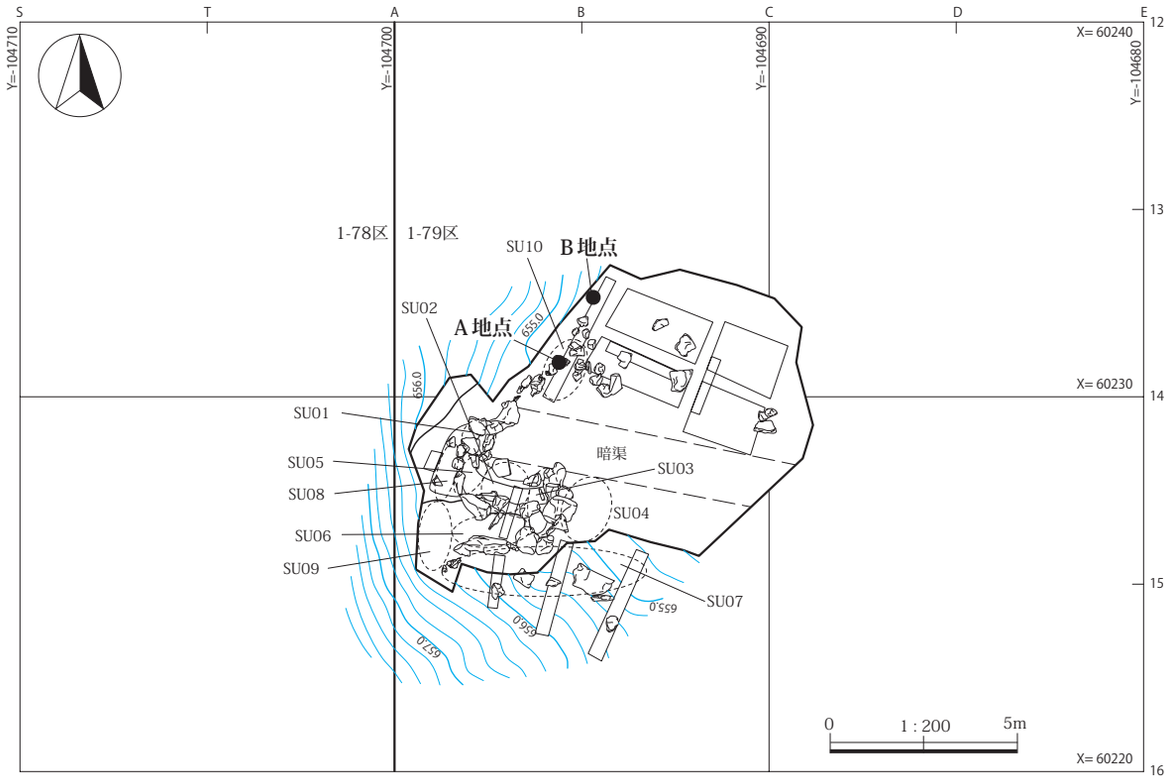
第１節　遺跡の概要

山根Ⅴ遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字横壁字山根に所在する縄文時代の水場に関わる遺跡である。遺跡は、町内では吾妻川流域地帯に属し、吾妻川の支流である深沢と白岩沢に挟まれた吾妻川右岸の中位段丘面上に立地する。遺跡のある段丘面の西部は、丸岩の山裾から北流する中村沢（旧小井戸沢）によって形成された沖積錐地形であり、遺跡は中村沢の左岸（西側）の扇央部の西端に位置している。遺跡の地形は沖積錐地形の西尾根の麓である。現況は、元来畑地であったが、西尾根の裾を北流する沢により湿地となっている。標高は 653.4m ～ 656.4 mである。

今回の発掘調査は山根Ⅴ遺跡の第１次調査にあたる。調査範囲は畑地の南西隅から尾根裾にかかる地形変換点にあたり、大字横壁字山根 467 に所在する。確認された遺構は、縄文時代中期前半の石組遺構１基（WU01）のみである。なお、地形や遺構の部位、遺物が比較的まとまって出土する箇所を 10 箇所、１～10 号遺物集中（SU01 ～ 10）として設定した。これらは、その平面範囲を、全体図や遺構実測図、遺物出



第264図　基本土層柱状図（1/20）



第265図　調査区全体図（1/200）

土状況図に記載している。

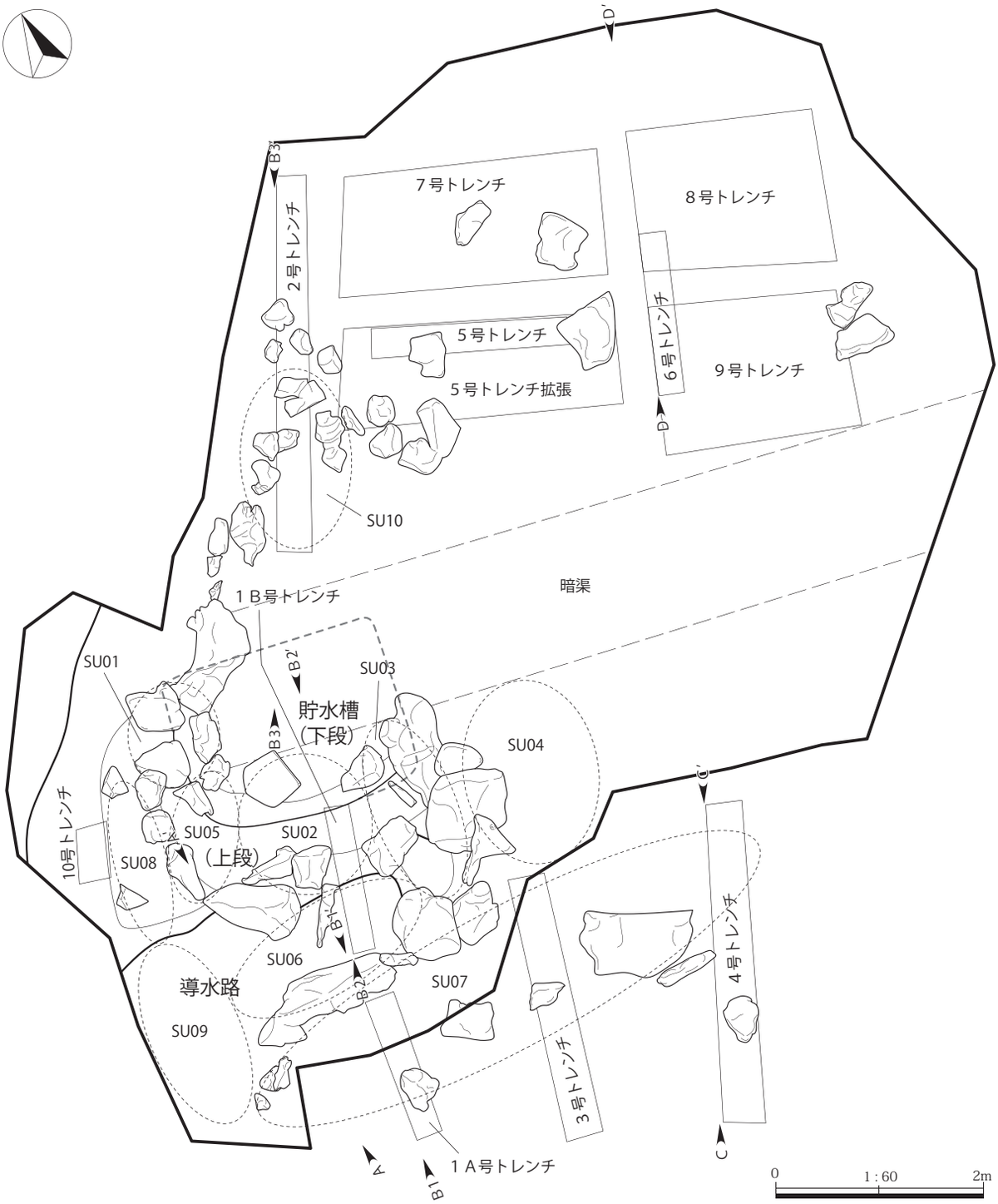
出土した遺物の種類は、縄文土器や石器、クルミの殻（核）などで、その数量はテンバコで７箱分であった。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

（１）石組遺構

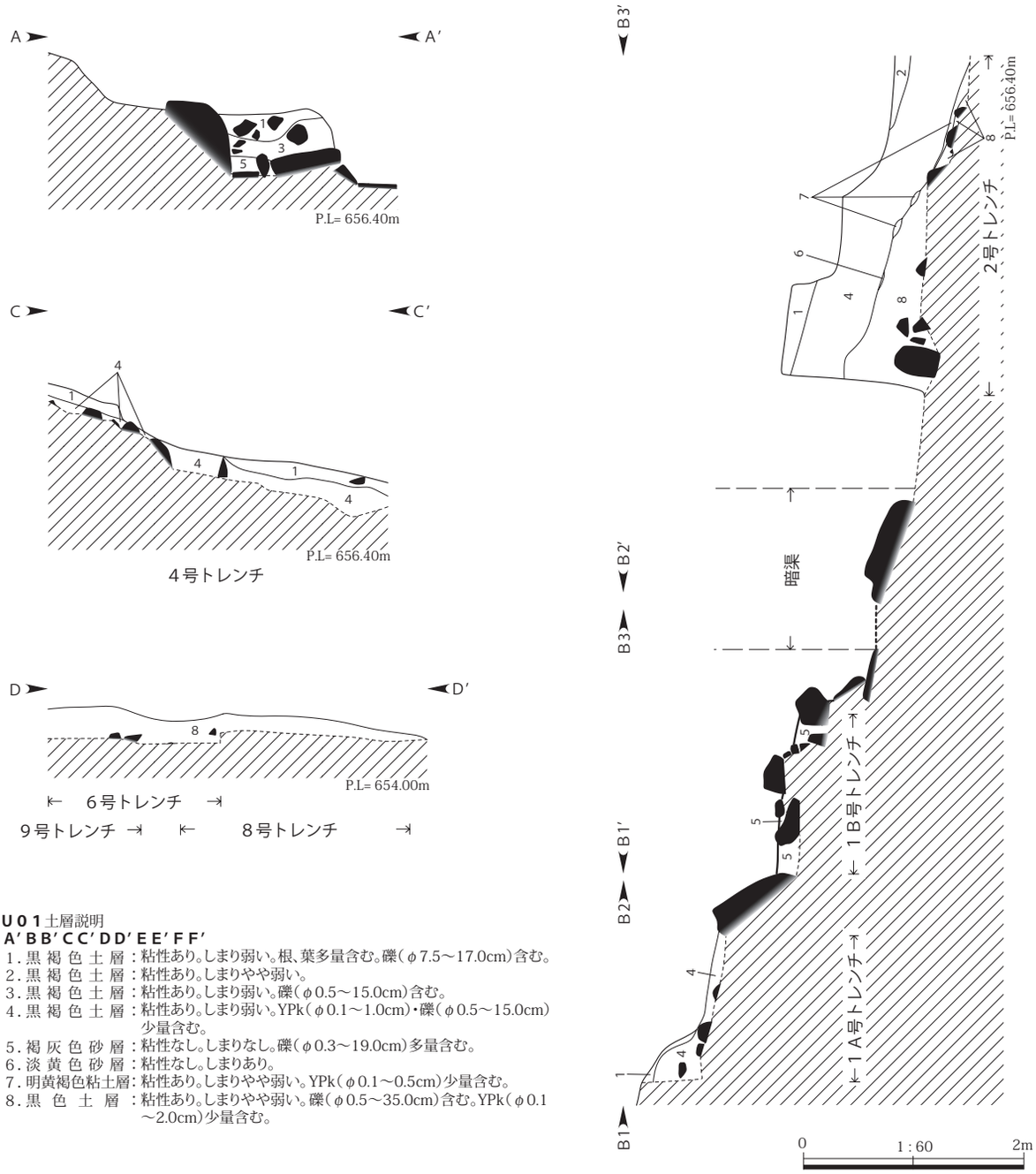
WU01（第 266 ～ 272 図／第 39 表／ＰＬ 35 ～ 37）

位置　１―79 区Ａ―14　**重複関係**　なし。　**遺存状態**　貯水槽と導水路が確認された。貯水槽は北東部の壁面（石組）と底面（下段）の大半が暗渠の設置工事で壊され、導水路の西側と南側の大半は調査範囲外であるが、遺存状態は比較的良好である。　**覆土**　黒褐色土が基調で、自然堆積を示す。　**平面形と規模**　貯水槽の平面形は、礫の配置は円形を呈しているが、石組の内側は隅丸長方形を呈する。全体の規模は長軸 2.67 m、短軸推定 2.44 m。貯水槽の下段の平面形は隅丸長方形で、長軸 2.22 m、短軸推定 1.36 m、深さ 114㎝、底面積 2.20㎡。貯水槽上段は、西辺と南辺にのびるＬ字形を呈し、長さ 3.73 m、幅 0.74 ～ 0.45 m、深さ 57cm、底面積 1.40㎡。上段と下段の比高差 57cm。導水路は、南南西方向から東南東方向へ直角に曲がるカギ形を呈し、長さ 3.88 m以上、幅推定 2.01 ～ 1.03 m、深さ 57cm、底面積 5.60㎡以上。　**主軸方位**　Ｎ―80°―Ｗ　**壁面**　貯水槽の壁面は石組で、木組は確認されていない。壁高は下段の南壁で 11cm、上段の南壁で 24㎝。ともに外傾して立ち上がる。導水路の壁面は、南壁と東壁は石組であるが、西壁は調査区外のため不明である。壁高は南壁で 60cm。外傾して立ち上がる。　**底面**　貯水槽下段の底面は、大半が暗渠の設置工事によって壊されていたが、直径約 50cm 大の方形の平坦な礫が残存しており、底面はこのような平石で敷きつめられていた可能性があり、概ね平坦である。貯水槽上段の底面は、20 × 36cm の長方形の平坦な礫や円礫で敷きつめられており、下段に向かってやや傾斜する。導水路の底面は、円礫で敷きつめられており、主に北方向に傾斜している。　**その他の施設**　貯水槽の北側は、工事により削平を受けており、調査開始の時点



第266図　WU01実測図（1/60）

で貯水槽下段の底面とほぼ同じ高さか、低くなっていた。自然地形的にも北側が低いことから、北側に排水施設の存在が期待されたが、トレンチ掘削でも検出されなかった。石組遺構の周辺では、東部が暗渠工事による深掘りで壊されており、南東側はトレンチ掘削したが、堅果類の殻の集積場などは発見されなかった。　**遺物検出状況**　石組遺構の内外から、遺物がある程度まとまって出土している（SU01 ～ 10）。遺物は主に貯水槽の上段（SU01 ～ 03・05）から大量に出土しており、次に導水路（SU06・09）から多く出土している。他に石組遺構の西側（SU08）や北側（SU10）から比較的多く出土しているが、東側（SU04）と南東側（SU07）からはまばらに出土している。　**遺物**　出土遺物のうち、縄文土器 20 点、石器 14 点を図示した。縄文土器



WU01土層説明
AA′BB′CC′DD′EE′FF′

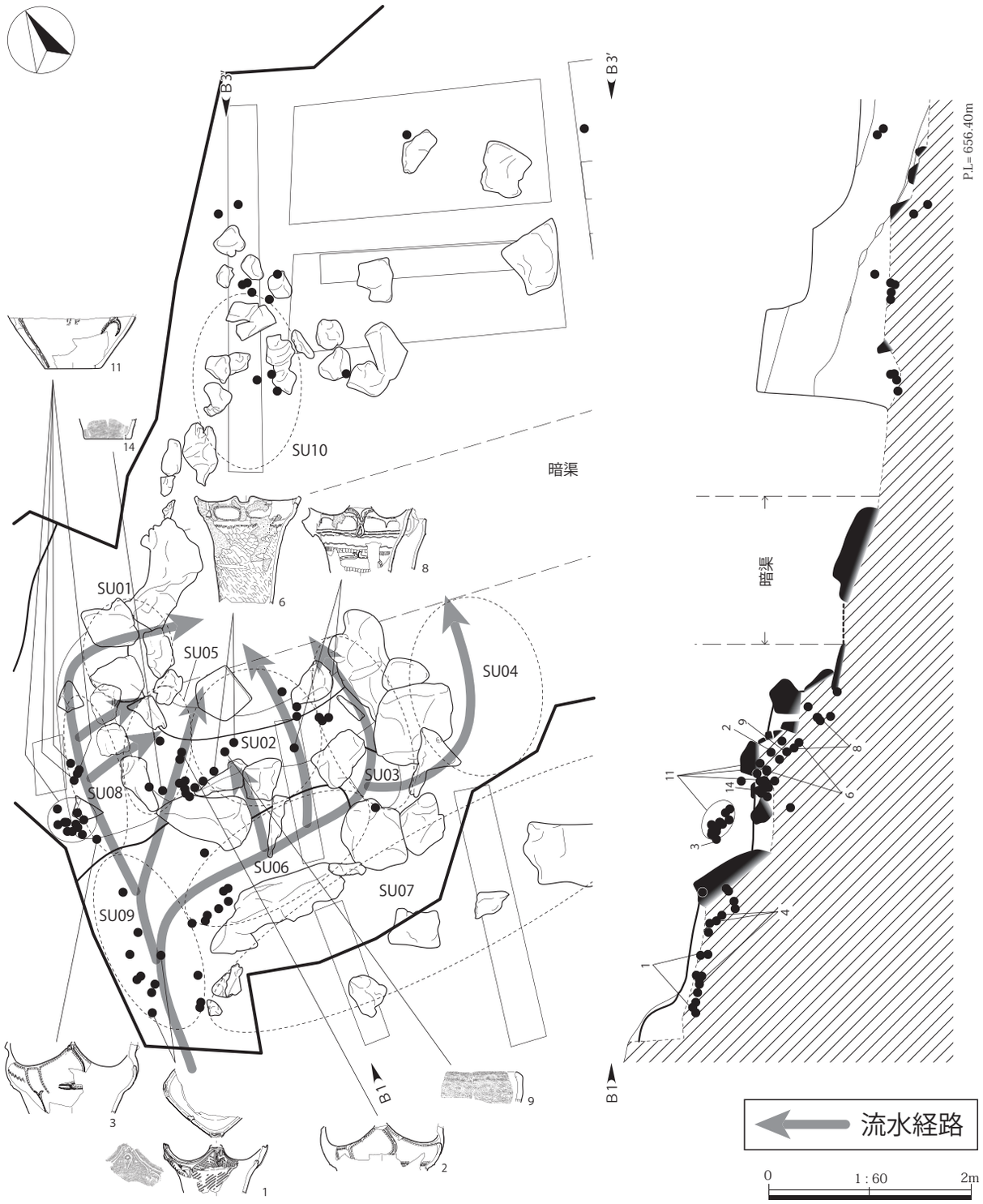
1. 黒褐色土層：粘性あり。しまり弱い。根、葉多量含む。礫（φ7.5～17.0cm）含む。
2. 黒褐色土層：粘性あり。しまりやや弱い。
3. 黒褐色土層：粘性あり。しまり弱い。礫（φ0.5～15.0cm）含む。
4. 黒褐色土層：粘性あり。しまり弱い。YPk（φ0.1～1.0cm）・礫（φ0.5～15.0cm）少量含む。
5. 褐灰色砂層：粘性なし。しまりなし。礫（φ0.3～19.0cm）多量含む。
6. 淡黄色砂層：粘性なし。しまりあり。
7. 明黄褐色粘土層：粘性あり。しまりやや弱い。YPk（φ0.1～0.5cm）少量含む。
8. 黒色土層：粘性あり。しまりやや弱い。礫（φ0.5～35.0cm）含む。YPk（φ0.1～2.0cm）少量含む。

第267図　WU01断面図（1/60）

は中期初頭の阿玉台式が大半を占め、石器は磨石や敲打痕のある磨石が大半を占める。その他にオニグルミの核を写真掲載した。　**備考**　本遺構は、水場に関わる石組遺構である。２段の貯水槽と導水路が検出されたが、排水施設や堅果類の殻の集積場などは発見されなかった。また、木組遺構も発見されなかった。帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期前葉と考えられる。

第５章　まとめ

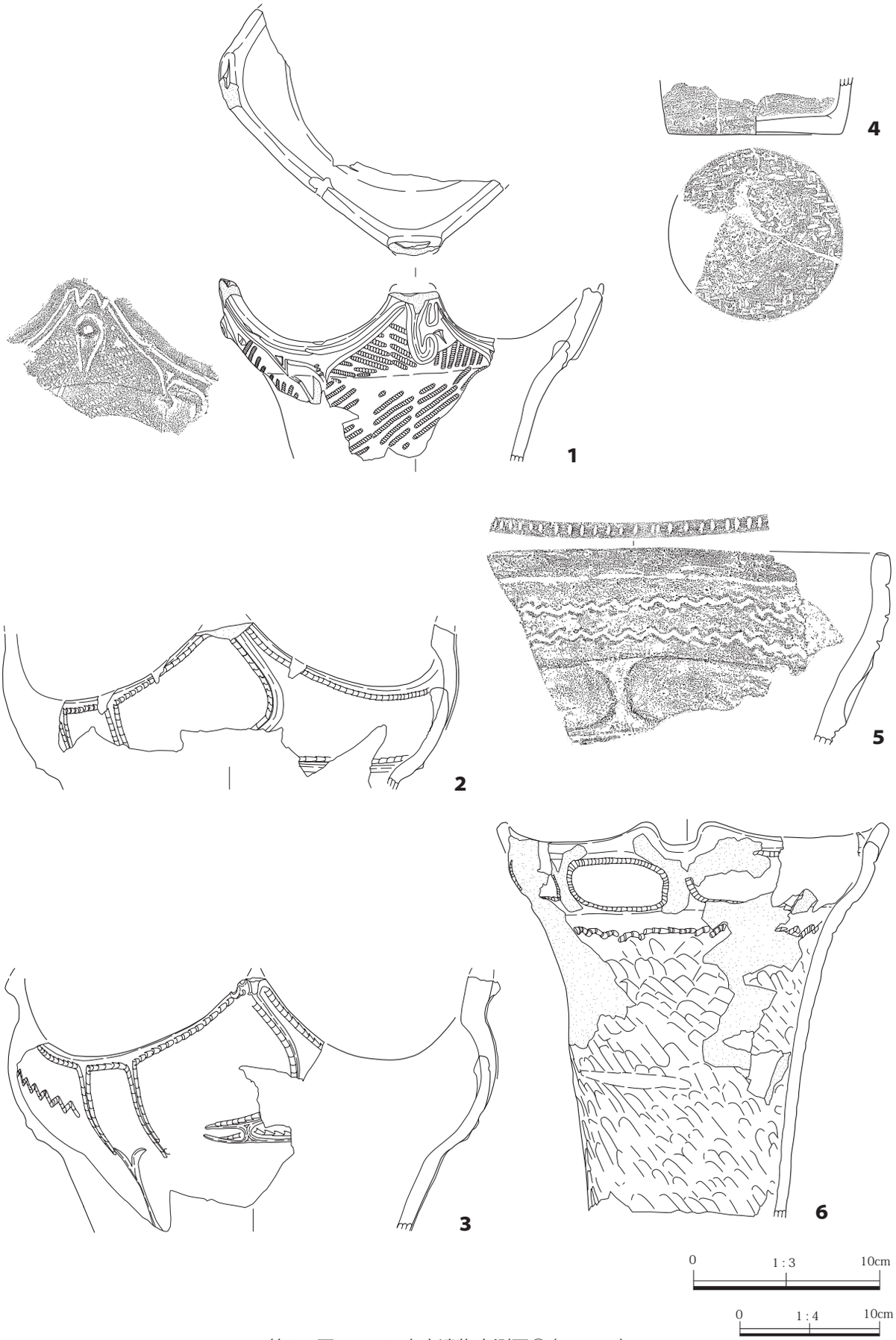
本遺跡から発見された石組遺構は、導水路や段差によって水の流れが誘導されて、貯水槽の下段に水を集める構造になっている。貯水槽では、木組みなどの木材は一つも発見されておらず、工事により壊されて無くなったのか、もともと無かったのかは不明である。導水路や段差部分では、水が流れた部分には小さな円礫（いわ



第268図　WU01遺物出土状況図（1/60）

ゆる川砂）が堆積しており、一種のろ過作用が生じているのか、川砂上の水は透明度が高くなっている。段差ではさらに水が滝のように流れ落ちるようになっており、その先で比較的大型の破片が出土したことから水を受ける容器として縄文土器が設置されていたと考えられる。排水路などの排水施設や木の実の殻の集積場は、工事やそれ以前の削平によるものか、発見されなかった。

出土した土器の大半は、縄文時代中期前葉に比定される阿玉台式土器が大半であり、Ia 式から IV 式まで全ての段階の阿玉台式が出土しているが、I 式が大半である。他に中期初頭の五領ヶ台式直後、同じく中期前葉



第269図　WU01出土遺物実測図①（1/3・1/4）

の勝坂式や焼町類型、前期前半の関山Ⅰ式や前期後半の諸磯ｂ式などの前期の遺物が出土している。

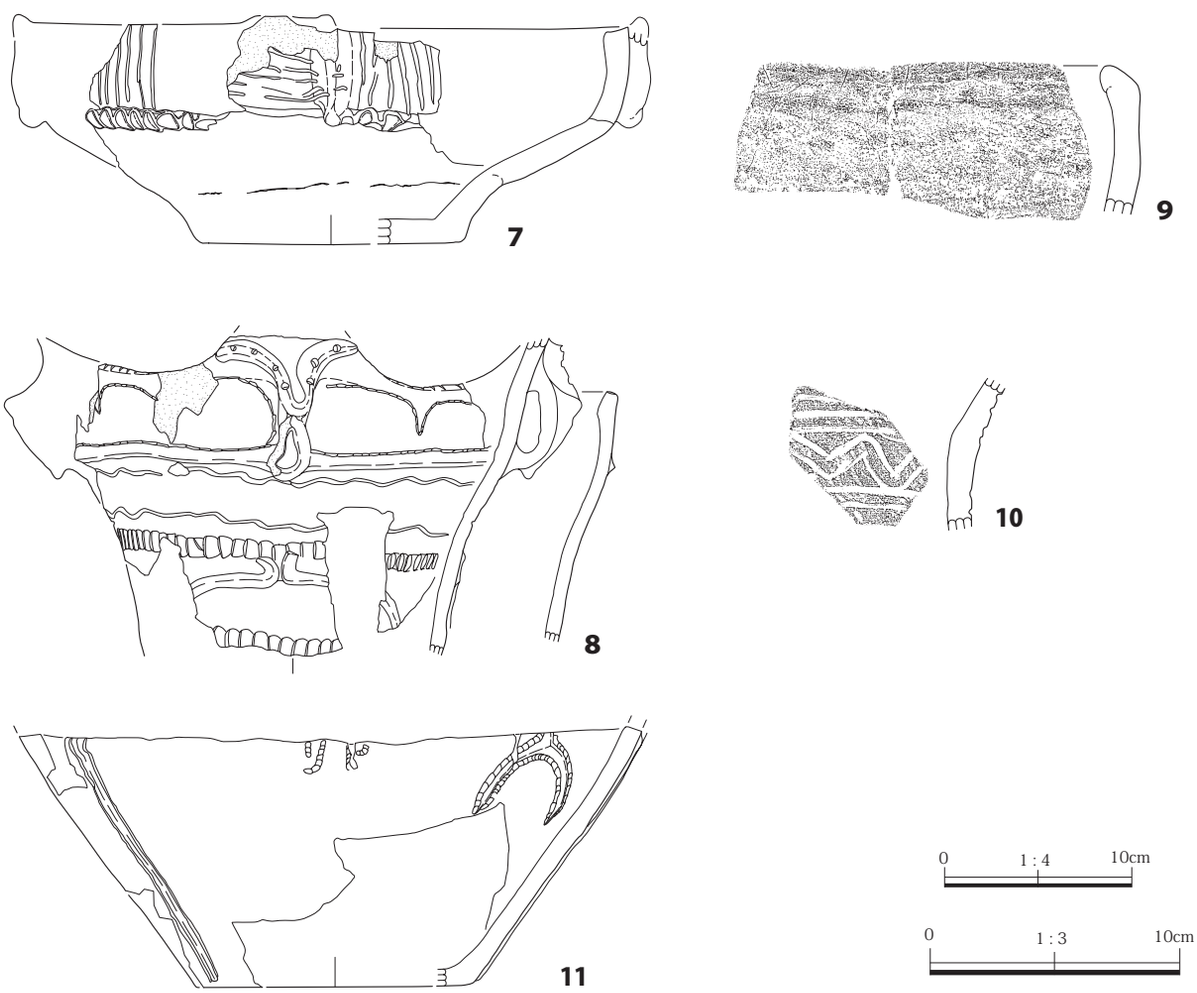
石組遺構の稼働時期は、中期前葉が主と考えられるが、前期の遺物もわずかであるが出土していることから、前期から使用されていた可能性も考慮する必要がある。

他の遺物では、凹みや敲打痕のある磨石が比較的目立って出土していることから、木の実の殻を割ったり磨り潰したりするために使用されたものと考えられる。トチの実やドングリは出土せず、クルミのみが出土している。東京都東村山市の下宅部遺跡では、中期の木組遺構でクルミが、後期の木組遺構でトチの実がアク抜きされていたことが分かっており、中期に比定される本遺跡の石組遺構でクルミのみが出土したことと齟齬はないものと考えられる。

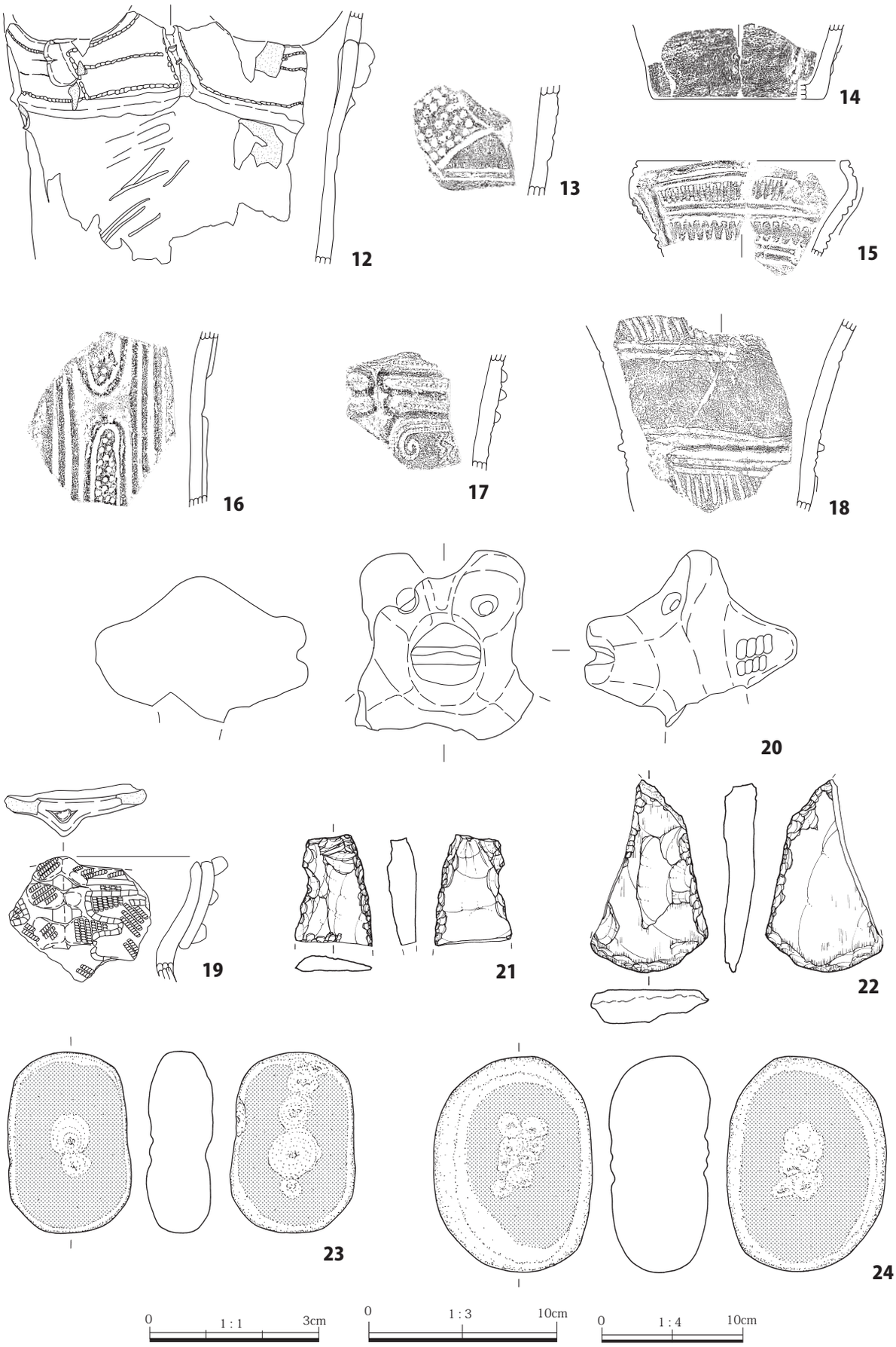
本遺跡は、周辺の試掘の成果から、遺跡の痕跡が発見されず、周辺に集落が存在しないと考えられる。

水場に関わる遺構は、県内ではみなかみ町の矢瀬遺跡（縄文時代晩期）や榛東村の茅野遺跡（縄文時代後～晩期）、渋川市の吹屋三角遺跡（縄文時代後期）、東吾妻町の唐堀遺跡（縄文時代後～晩期）、安中市の人見枝谷津（ひとみえだやつ）遺跡（古墳時代）、安中市の中原遺跡（奈良・平安時代）などで発見されているが、町内でも西久保Ⅰ遺跡（縄文時代中期中葉）、石川原遺跡（縄文時代後～晩期）や林中原Ⅰ遺跡（中世～近世）で発見されている。

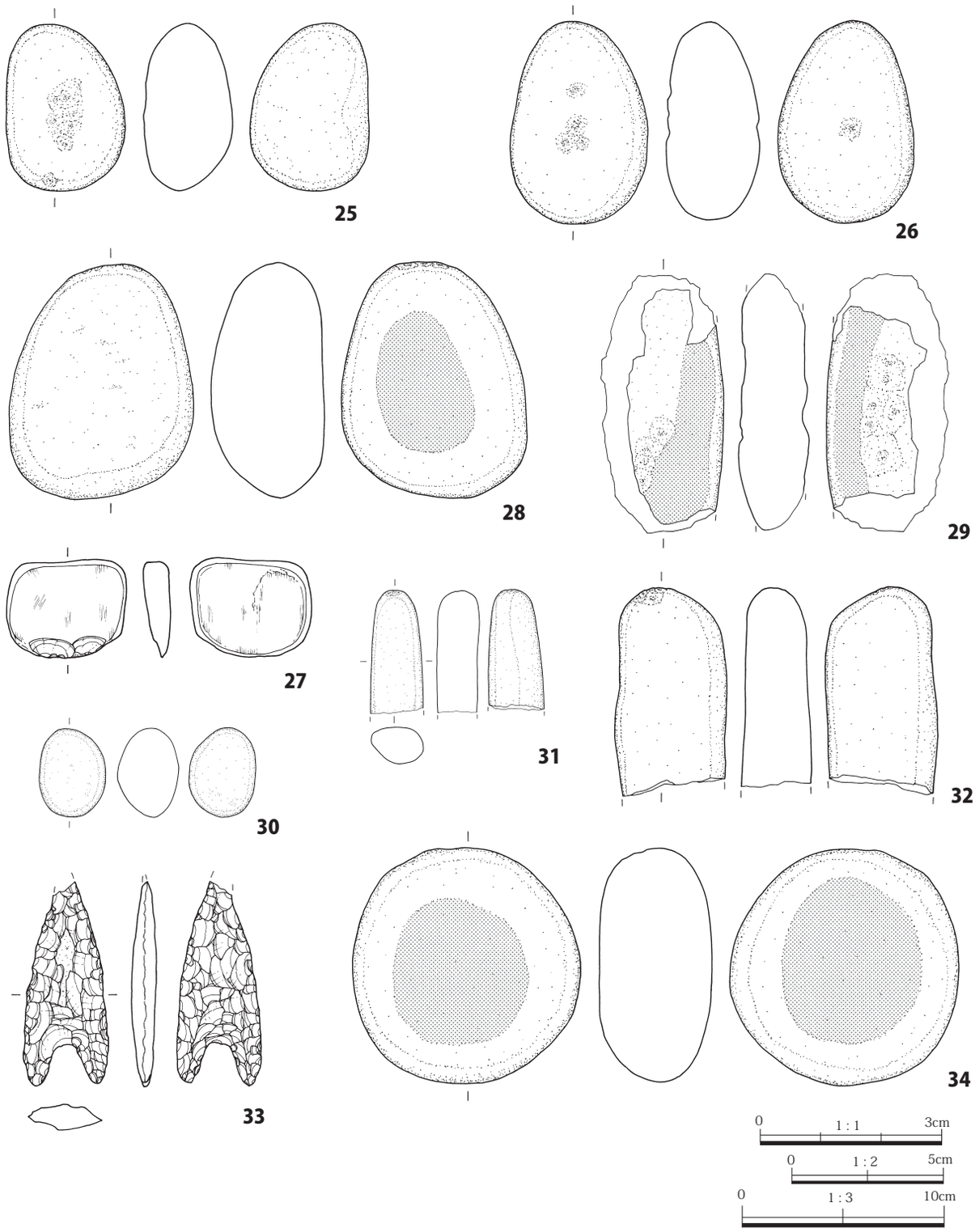
縄文時代では後期から晩期のものが多い中で、前期から中期前半である点が珍しく、近隣の西久保Ⅰ遺跡が中期中葉と近い時期であり、集落外にあるという立地状況も似ていることから、その関係性が今後の課題と考えられる。



第270図　WU01出土遺物実測図②（1/3・1/4）



第271図　WU01出土遺物実測図③（1/1・1/3/1/4）



第272図　WU01出土遺物実測図④（1/1・1/2・1/3）

参考文献

渡辺誠・他　2003 『縄文時代の台所・水さらし場遺構を考える―縄文人は水とどうかかわってきたか―』 青森市教育委員会

工藤雄一郎・他　2007 「東京都下宅部遺跡から出土した縄文時代後半期の植物利用に関連する遺構・遺物の年代学的研究」
『植生史研究』15-1　日本植生史学会

栗島義明・他　2019 『「トチの実加工場」は存在したのか？－縄文時代の木組遺構とその機能を考える―』 明治大学黒耀石研究センター

第 39 表　山根Ⅴ遺跡出土遺物観察表

WU01 出土遺物観察表

挿図No.	図版No.	器種	法量(器高／口径／底径)(cm)	特徴（形態・手法等）	焼成	胎土・材質等	色調(外面／内面)	備考	
269- 1	36	縄文土器・深鉢	（12.4）／＜ 27.4 ＞／－	波状口縁。口縁部に沈線文を２条施文。波頂部から伸びるＪ字状の隆帯と円状の隆帯が交互に配されると思われる。地文には単節 RL 縄文を施文する。中期初頭(五領ヶ台Ⅱ式直後)か。	良好	砂粒・雲母	にぶい黄褐／灰黄褐	口縁部 40％残存。	WU01
269- 2	36	縄文土器・深鉢	（11.8）／＜ 31.4 ＞／－	波状口縁。口縁部から頸部が強く張り出す。頸部に横位隆帯、波頂部から弧状に隆帯を施し、口唇部と隆帯に沿って半裁竹管による角押文を施文する。中期前半（阿玉台 Ia 式）。	良好	雲母	黒褐	口縁部 40％残存。	WU01・WU01 集中５・６
269- 3	36	縄文土器・深鉢	（18.0）／＜ 34.0 ＞／－	波状口縁。口縁部から頸部が強く張り出す。体部にＹ字状の隆帯、波頂部から弧状に隆帯をめぐらす。口唇部と弧状隆帯に沿って半裁竹管による角押文を施し、頸部中位に波状の角押文を施文する。中期前半（阿玉台 Ia 式）か。	良好	雲母	黒褐	口縁部 20％残存。	WU01・WU01 集中５
269- 4	36	縄文土器・深鉢	（4.0）／－／ 12.4	底部網代圧痕／２超２潜１送（経条・緯条２本組）。中期前半（阿玉台 Ia 式）か。	良好	砂粒・白色粒	赤褐／黒褐	底部完存。	WU01 集中５
269- 5	36	縄文土器・深鉢	（10.2）／－／－	口縁下に押引きによる直線を１条、波状沈線を２条施文する。口唇部には刻みを施す。中期前半（阿玉台 Ib 式）か。	良好	砂粒・雲母・角閃石	赤褐／にぶい褐	口縁部 15％残存。	WU01 集中２
269- 6	36	縄文土器・深鉢	（28.3）／ 17.0 ／－	口縁部から体部にかけて剥落が激しい。隆帯によるＸ字状のモチーフが施されていたと見られる。口縁部に円形の角押文を、体部と頸部の境目に波状の角押文を施す。口縁部内面に稜を持つ。体部は斜位ナデか。中期前半（阿玉台 Ib 式古段階）か。	良好	砂粒・雲母	暗褐／黒褐	口縁部～体部 90％残存。	WU01・WU01 集中２・表土・排土
270- 7	36	縄文土器・浅鉢	12.3 ／＜ 33.4 ＞／ 14.0	内外面ナデ。内面剥落激しい。口縁部に隆帯による突起を貼付する。口縁部と頸部の境に隆帯を貼付し、その上に円形の圧痕文を施す。中期前半（阿玉台 Ib 式古段階）か。	良好	砂粒・雲母	灰黄褐／黒褐	口縁部～底部 20％残存。	WU01 集中３・排土・表採
270- 8	36	縄文土器・深鉢	（16.9）／＜ 27.4 ＞／－	粘土紐の環状突起を貼付。体部上部に隆帯を施し区画帯を作る。口縁部に波状の押引文、体部に波状沈線を施文する。中期前半（阿玉台 Ib 式古段階）か。	良好	砂粒・雲母	灰黄褐／褐	口縁部～体部 40％残存。	WU01・WU01 集中２・３・表土・排土
270- 9	36	縄文土器・深鉢	（5.9）／－／－	無文。内外面ともに口唇部ナデ。中期前半（阿玉台 Ib 式）か。	良好	角閃石	にぶい黄褐	口縁部 10％残存。	WU01・WU01 集中２
270-10	36	縄文土器・深鉢	（5.9）／－／－	浅い横位沈線を上下に２条ずつ施し、その間に山形の沈線を２条施す。中期前半（阿玉台Ⅱ式）か。	良好	砂粒・角閃石・黒色粒	明赤褐	破片資料（体部）	WU01 集中５
270-11	36	縄文土器・浅鉢	（15.8）／－／＜ 16.8 ＞	体部に縦位直線と半円形の隆帯を交互に配し、それに沿って押引文を施す。中期前半（阿玉台 Ib 式）か。	良好	砂粒	にぶい褐	底部～体部 90％残存。	WU01・WU01 集中５・８
271-12	36	縄文土器・深鉢	（17.9）／＜ 25.6 ＞／－	波状口縁。口縁部に縦位の、頸部に横位の隆帯を貼付し、口縁部と隆帯に沿って押引文を施す。表面は粗く隆帯貼付痕が明瞭。内面は横位ナデで調整され滑らか。中期前半(阿玉台 Ib 式)か。	良好	砂粒・雲母	灰黄褐／黒褐	口縁部～体部 40％残存。	WU01 集中２・表土・排土・表採
271-13	37	縄文土器・深鉢	（5.8）／－／－	横位の沈線を２条施文するほか、弧状の沈線で菱形の区画を形成し、内部に刺突文を施す。中期前半（勝坂Ⅰ式）か。	良好	砂粒・角閃石・白色粒	にぶい赤褐／黒褐	破片資料（体部）	WU01 集中２
271-14	37	縄文土器・深鉢	（5.2）／－／＜ 12.0 ＞	内外面ナデ。内面スス付着。低い隆帯状の粘土紐を貼付する。底部付近は無文。中期前半(阿玉台 Ib ～Ⅱ式）か。	良好	砂粒	にぶい褐	底部 40％残存。	WU01・WU01 集中１・５
271-15	37	縄文土器・深鉢	（6.8）／＜ 15.0 ＞／－	隆帯を縦横に貼付して区画帯を形成し、区画内部に沈線文、刺突文を施す。中期前半（勝坂Ⅰ式）か。	良好	砂粒・角閃石	褐／暗褐	口縁部 20％残存。	WU01 集中２
271-16	37	縄文土器・深鉢	（9.2）／－／－	縦位隆帯・楕円形隆帯を施し、楕円形区画内に刺突文を施文する。中期前半（勝坂Ⅰ式）か。	良好	砂粒・白色粒	赤褐／黒褐	破片資料（体部）	WU01 集中２
271-17	37	縄文土器・深鉢	（6.0）／－／－	隆帯により幅の狭い楕円形区画を形成し、それに沿って角押文を施す。中期前半（勝坂Ⅰ式）か。	良好	砂粒・白色粒	赤褐／暗褐	破片資料（体部）	WU01 集中２
271-18	37	縄文土器・深鉢	（13.6）／－／－	隆帯を１条貼付し、隆帯に沿ってごく浅い沈線を上下に施文する。斜行沈線文系土器で、勝坂Ⅰ式に併行する。	良好	砂粒・雲母・石英	赤褐／黒褐	破片資料（体部）	WU01 集中２
271-19	37	縄文土器・深鉢	（6.0）／－／－	口縁部に縦位で粘土紐を貼付し、その上から横位の隆帯を３条貼付する。単節 RL 縄文と蛇行する押引文を施文する。	良好	砂粒	赤褐／にぶい褐	破片資料（口縁部）	WU01 集中５
271-20	37	縄文土器・深鉢	（3.3）／－／－	獣面把手。クマかイヌの頭部か。背面に単節 RL 縄文が僅かに残る。中期（型式不明）。	良好	砂粒	赤褐	破片資料（口縁部把手）	WU01 集中２
271-21	37	打製石斧類・打製石斧	長（5.7）／幅 4.0 ／厚 1.5	重量 37.3g。大きく欠損しているが打製石斧か。	－	黒色頁岩	－	40％程度残存か。	WU01 集中２
271-22	37	打製石斧類・打製石斧	長（10.0）／幅 6.1 ／厚 1.6	重量 88.4g。斜めに大きく剥離し上部が欠損する。	－	黒色頁岩	－	70％程度残存。	WU01 集中５
271-23	37	礫石器類・凹石	長 9.5 ／幅 6.5 ／厚 3.4	重量 339g。両面ともに中央にくぼみを持ち、側面にもくぼみがある。両面よく磨られている。	－	安山岩	－	完存。	WU01 集中２

271-24	37	礫石器類・凹石	長 11.3 ／幅 8.4 ／厚 5.3	重量 676g。両面とも中央にくぼみを持つ。片面には多孔石状の複数のくぼみが見られる。	―	安山岩	―	完存。 WU01 集中 9
272-25	―	礫石器類・凹石＋磨石	長 8.2 ／幅 5.8 ／厚 4.3	重量 286g。両面よく磨られ、片面には深いくぼみが残る。もう片面のくぼみは浅く僅か。	―	安山岩	―	完存。 WU01 集中 5
272-26	37	礫石器類・磨石	長 10.0 ／幅 6.7 ／厚 4.5	重量 399g。両面よく磨られ、端部には敲打痕がある。	―	安山岩	―	完存。 WU01 集中 2
272-27	―	礫石器類・磨石	長 5.9 ／幅 4.7 ／厚 1.2	重量 55.9g。扁平で片面は磨られ平坦。	―	砂岩	―	完存。 WU01 集中 2
272-28	37	礫石器類・磨石	長 11.4 ／幅 9.0 ／厚 5.6	重量 757g。両面よく磨られ、両端部には敲打痕がある。	―	安山岩	―	完存。 WU01 集中 5
272-29	37	礫石器類・磨石か	長（12.5）／幅（6.0）／厚 3.4	重量 327g。全体に粗く凹凸が激しいが、一部に磨り面が残る。	―	安山岩	―	完存。 WU01 集中 6
272-30	37	礫石器類・磨き石か	長 4.3 ／幅 3.3 ／厚 3.0	重量 49.2g。全面がよく磨られ滑らか。かなり小型のため磨き石か。	―	安山岩	―	完存。 WU01 集中 2
272-31	37	礫石器類・敲石	長（6.0）／幅 2.6 ／厚 2.0	重量 49.2g。全面滑らか。	―	砂岩	―	50％程度残存か。 WU01 集中 1
272-32	37	石製品・砥石	長（10.2）／幅 5.4 ／厚 3.3	重量 286g。4 面使用される。4 面とも磨られ滑らか。上部には貫通はしていないものの穿孔の痕跡が残る。下端部欠損。	―	砂岩	―	80％程度残存か。 WU01 集中 6
272-33	37	剥片石器類・石鏃	長（3.3）／幅 1.4 ／厚 0.4	重量 1.8g。凹基。	―	頁岩	―	完存。 WU01 排土
272-34	37	礫石器類・磨石	長 11.5 ／幅 11.2 ／厚 5.6	重量 1055g。両面が磨られ、端部には敲打痕と思われるくぼみと亀裂がある。	―	安山岩	―	完存。 WU01 排土
―	37	クルミ・核	長 3.9 ／幅 3.0 ／皮厚 0.3-0.5	重量 3.4 ｇ。オニグルミ。合わせ目できれいに割れた半片。内面に細かい擦痕がある。内部の仁を掻き出した痕か。	―	―	褐／褐	50％。 WU01 集中 7